

ドイツ語初級クラスにおける「言語＋文化」教育

田畑, 義之
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/4274>

出版情報：言語文化論究. 12, pp.127-136, 2000-08-31. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



ドイツ語初級クラスにおける「言語＋文化」教育

田 畑 義 之

1. はじめに

大学設置基準の「大綱化」以来、専門科目を増やすために、多くの大学でドイツ語をはじめとする初習外国語の必修単位がなしくずし的に減らされている。また、学生による授業評価や第三者機関による大学の点検評価が求められているのと併せて、今や大学における初習外国語教育は岐路に立たされていると言える。大学の全学共通教育科目としての初習外国語科目の灯を消してしまわないためには、初習外国語をもっと魅力あるものにするためのカリキュラムと授業内容の大胆な改革が急務である。

また、小学校への英語教育の導入、英語第2公用語論などの流れの中で、大学教育においても「外国語は英語だけで十分である」とする誤った認識が広まりつつある。国際化社会に対応するためには、様々な言語文化圏についての知識・理解が欠かせないのは明らかであるのに、学生は英語圏についてはいろいろな情報を持っていますが、それ以外の言語文化圏についてはあまり知識も理解もないと想像されるが、実態ははたしてどうなのか。

本稿では、九州大学での全学アンケートの結果を基に学生の各言語文化圏についての知識の不均衡の実態を明らかにすると共に、九大で5年前から実施されている「言語＋文化」教育が、この不均衡を是正し、同時に言語学習の動機付けにもなることを述べる。

2. 学生の各言語文化圏についての知識

九州大学では、教養部が廃止された1994年度から毎年全学共通教育についての学生アンケートを実施しているが、1996年度の言語文化科目についてのアンケート調査では、学生が各言語文化圏についてどの程度の知識・理解を持っているかについても調査した。対象としたのは1996年度に九州大学に入学した1年生全員の2,501名で、そのうち2,415名から回答を得た(回答率96.6%)。アンケートでは九大で言語文化科目として開講されている英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、朝鮮語、スペイン語の7言語文化圏についての知識・理解を調べるため、アメリカ合州国、イギリス、ドイツ、フランス、中国、ロシア、韓国、スペインのそれぞれについて以下の5つの質問をした。¹⁾

Q1: この国の首相か大統領の名前を知っていますか?

Q2: この国の首都がどこか知っていますか?

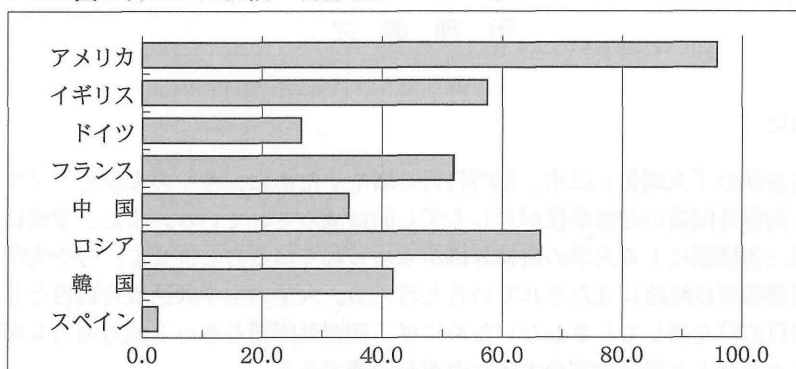
Q3: この国の映画を見たことがありますか?

Q4: この国の歴史や文化を多少でも知っていますか?

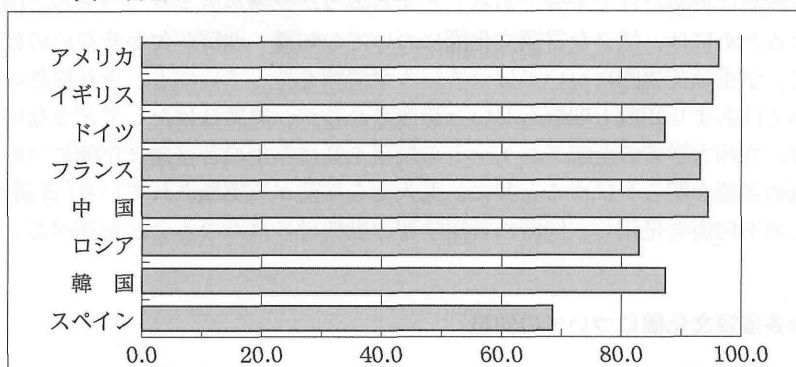
Q 5 : この国の最近のニュースを知っていますか？

それぞれの質問に「はい」と答えた学生の割合をグラフで示すと以下のようなになる（目盛りはパーセント）。²⁾

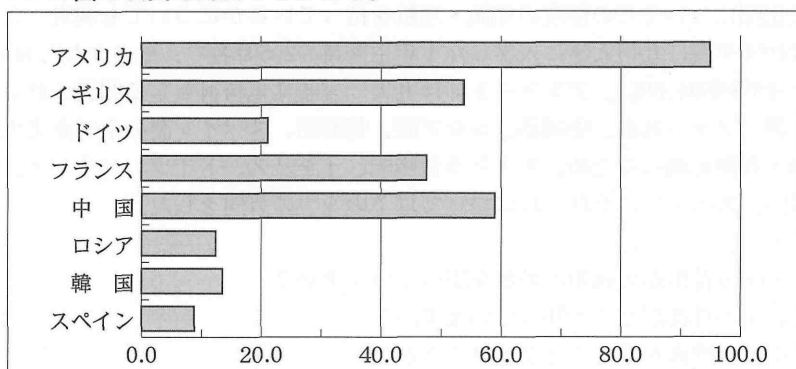
A 1 : この国の首相か大統領の名前を知っている。



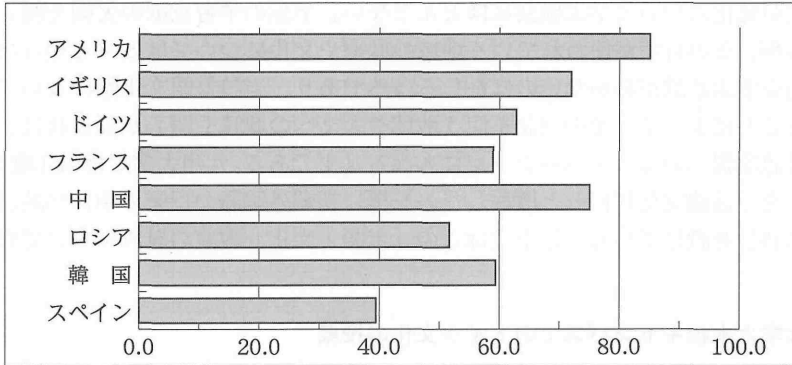
A 2 : この国の首都がどこか知っている。



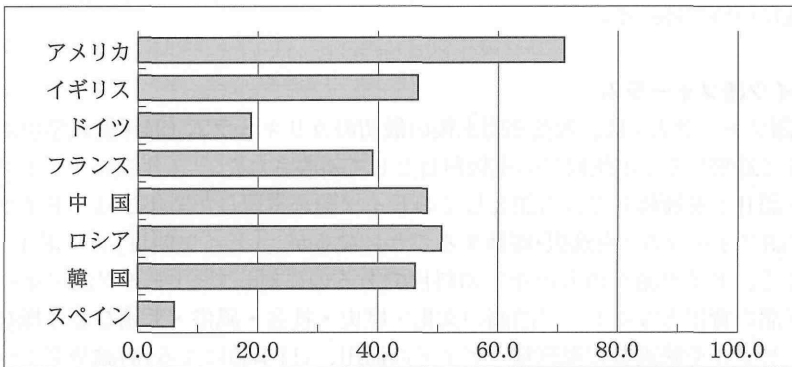
A 3 : この国の映画を見たことがある。



A 4 : この国の歴史や文化を多少でも知っている。



A 5 : この国の最近のニュースを知っている。



英語圏とそれ以外の言語文化圏についての学生の知識・理解には大きな差があることは予想していた通りであったが、その差は予想以上であり、また英語圏と言うよりもアメリカの独り勝ちであり、日本のマスコミのアメリカ一極集中の報道姿勢の影響をもろに受けた学生の知識の偏りが見てとれる。³⁾

Q 4 の「歴史・文化」については他の質問に比べて一見成績が良いように見えるが、質問が「この国の歴史や文化を多少でも知っていますか？（下線は筆者）」となっていることを考えると、例えばドイツであれば「ビール、黒パン、ソーセージ、ヒトラー、ベンツ、BMW」くらいの知識であっても「はい」と答えている可能性が高いと思われる。

Q 2 の「首都」は頻繁に変わるものではなく一度覚えるだけで済むので⁴⁾、どの文化圏についてもほぼ70%を超える良い成績になっているのに対して、Q 1 の「首相・大統領」やQ 5 の「最近のニュース」のように、一度覚えただけではダメで、常に新しい情報に接している必要があるものについては、アメリカの優位性が目立つ結果となっている。首都などは小・中学校の地理の授業でどの文化圏についても平等に学習するのにに対して、最新情報は偏ったマスコミ報道に頼らざるを得ない側面が浮き彫りにされていると言えよう。

このアンケートによって、学生がアメリカ文化以外の言語文化については非常に乏しい知識しか持っていないことが確認された。本来初習外国語の学習は、この知識の不均衡を

是正するための大きな足掛かりになるはずであるが、実際には言語プロパーの授業が大部分で、学生が文化について学ぶ機会ほとんどない。学生の学習意欲の欠如を嘆く声をよく耳にするが、その言葉が使われている地域の歴史や文化についてほとんど知らない状態でその言語を学ぶ意欲がわからないのはむしろ当然であり、当該言語文化圏についても同時に学習することによって、その言語を使う地域や人々への興味や関心が高まれば、それは自ずから言語学習へのモチベーションにもなるはずである。九州大学では94年度から「外国語科目」を「言語文化科目」と改称したのを機に初習外国語の授業の中に当該言語圏の文化を学ぶ科目を設けている。以下ではこの「言語+文化」教育の試みについて詳述する。

3. 九州大学六本松キャンパスでのドイツ文化の授業

本節では、九州大学の全学共通教育の中で行われてきたドイツ文化教育の試みとして「ドイツ語フォーラム」と「ドイツ語総合コース」の2つを紹介し、これらの授業に対する学生の評価について述べる。

3.1. ドイツ語フォーラム

「ドイツ語フォーラム」は、教養部廃止後の最初のカリキュラム（94年度入学生から98年度入学生まで適用）で2年生向けの選択科目として新設された。⁵⁾ 1年次に「ドイツ語Ⅰ」と「ドイツ語Ⅱ」を履修して、言語としてのドイツ語を学習した2年生は「ドイツ語Ⅲ」か「ドイツ語フォーラム」を選択・履修することになるが、「ドイツ語Ⅲ」が「ドイツ語Ⅰ・Ⅱ」と同じく、ドイツ語そのものを学ぶ科目であるのに対して、「ドイツ語フォーラム」は、ドイツ語の背景となるドイツ語圏の文化・歴史・社会・風俗・芸術など多様なテーマについて、ビデオや映画など視聴覚メディアの活用、(日本語による)討論やグループ作業など、様々な授業形態で多角的に学ぶ科目として位置づけられていた。この科目は当初は80人規模の大人数授業として計画されていたが、2年目の96年度からは受講者を50人程度に制限することになった。これは大人数クラスに問題があったからではなく、「ドイツ語フォーラム」に希望者が殺到して、「ドイツ語Ⅲ」の受講者数が激減したので、「ドイツ語Ⅲ」の受講者数を適正規模に維持するための措置であった。⁶⁾

99年度入学生から適用される新しいカリキュラムでは、言語文化科目の必修単位が削減され、理系の学生の第2外国語は1年次で修了(4単位)となってしまったため、「ドイツ語フォーラム」は、99年度の2年生(98年度入学なので旧カリキュラムが適用される)への授業を最後に廃止され、ドイツ語圏の文化を扱う授業は「ドイツ語総合コース」に受け継がれることになった。

3.2. ドイツ語総合コース

99年度からの新カリキュラムでは、1年生のドイツ語の授業には「総合コース」「演習コース」「オーラルコース」「CALLコース」「インテンシブコース」の5つのコースが設けられ、学生は自分の学習目標によって好きなコースを選択して受講できるようになっている。⁷⁾ 「ドイツ語総合コース」は、ドイツ語だけでなく、ドイツ文化も学習したい学生を対象とするコースで、週2回のうちの1回はドイツ語の運用能力養成のための中人数授業(40

名程度)を行ない、他の1回は2つのクラスを合併した80名程度の大人数クラスで、ドイツ語圏の文化を学ぶ。⁸⁾ 大人数授業では、ビデオなどの映像メディアを用いる他、教師から学生への一方通行の授業になるのを防ぐため、T Aを活用したり、グループ発表等を通して授業密度を高める工夫がされている。⁹⁾

3.3. ドイツ文化の授業に対する学生の評価

ここでは筆者が95年度から99年度までに担当した「ドイツ語フォーラム」(95、96、97年度)および「ドイツ語総合コース」(99年度前・後期)の受講生に対して学期末に行なったアンケートの結果から、この授業が学生からはどのように評価されているのかを見てみたい。

アンケートは「ドイツ文化を学ぶという新しい形のドイツ語の授業はどうでしたか?」という質問に対して「とてもよかった」「よかった」「まあまあ」「よくなかった」の4つの選択肢の中から1つを選ばせ、選択理由も書かせるという形式にした。¹⁰⁾ 各クラスの学生の回答がそれぞれ全体の何パーセントであったかを示すと次のようになる。

	フォーラム'95	フォーラム'96	フォーラム'97	総合'99前期	総合'99後期	平均
とてもよかった	52.7%	16.7%	43.2%	51.4%	64.9%	49.4%
よかった	36.6%	64.3%	51.4%	43.2%	31.1%	42.2%
まあまあ	10.8%	19.0%	5.4%	5.4%	2.7%	8.1%
よくなかった	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.4%	0.3%

一見して分かるように、どのクラスでもドイツ文化を学ぶという授業に対する学生の評価は非常に高い。「とてもよかった」と答えた学生の割合が他のクラスに比べてかなり低かった96年度の「フォーラム」でも「とてもよかった」と「よかった」を合わせると全体の81%であり、他の4つのクラスでは、この2つの合計はほぼ90%以上である。5つのクラスの平均値で見ても「とてもよかった」と「よかった」を合わせて91.6%の学生がこの授業を肯定的に評価していることになる。一番最近の99年度後期のクラスでは、「とてもよかった」と「よかった」の合計は96%にもなる。驚異的な数字である。学生の文化に対する関心がいかに高いかを示すものであると言える。¹¹⁾

アンケートの自由記述欄に記された学生の意見によれば、学生自身もドイツ語圏の文化については非常に乏しい知識しか持っていないことをきちんと認識しており、言語だけでなく、文化についても学びたいと望んでいることがわかる。さらにはドイツ文化を学ぶ授業を受講したことで、ドイツ語圏の文化への興味が深まり、それがドイツ語学習への動機付けになっていることも見て取れる。

99年度前・後期の「ドイツ語総合コース」のアンケートに記された学生の代表的な意見を以下に示す：

- ・ドイツという国について、言語もだけど、一般の生活についてもまったく知らなかったもので、そういう点を学べたということは非常によかった。
- ・「ドイツ＝ヒトラー、ソーセージ、黒ビール」しか知らなかったもので、何もかも初めて知ることばかりだった。

- ・楽しくドイツ文化を学ぶことができた。自分の中でのドイツに対する意識が変わった。
- ・言語ばかりして、言語の根本であるその国の文化、考え方、制度を知らないでいるのはおかしい。国際人というのは外国語が話せるだけではなれるものではないと思う。今までまったく知らなかったことを学べたし、とてもおもしろくてドイツに興味があった。
- ・大学に入って他の多くの授業にはがっかりすることが多かったけど、この授業は楽しくおもしろいの、ドイツ文化もちゃんと知ることができてとてもよかった。
- ・ドイツ語を学ぶだけだったら、今よりもドイツに関心を持たなかったと思う。是非ドイツに行ってみたいと思った。
- ・楽しく学ぶことができた。自分でも本などを読んで調べてみたいという気になった。
- ・ドイツの言葉だけよりは、やはりその言葉がどんな人たちに使われているかを知りたかったので、とてもよかった。今までの先入観と型にはまったイメージでなく、生のドイツを見れた気がした。最近何となくドイツに興味を持つ自分がいることに気づくことが多い。
- ・文化を学ぶことによって、ドイツについて興味がとても沸いて、文法等の勉強にも身が入った。
- ・日本との違いなどが認識できた。ドイツに行ってみたくなったから、もっとドイツ語を勉強しようと思う。
- ・この形（ドイツ語自体を学ぶ授業と、ドイツ文化を学ぶ授業との併用）はこれからも続けてほしい。
- ・ドイツ語の語学のみを学ぶというのは、やはり負担が大きいと思うし、文化ばかりを学ぶというのも単なるドイツに対する興味・関心で終わってしまいそうなので、両方を平行して行なうのはいいと思う。

最後の2つの意見に見られるように、「言語+文化」を平行して学ぶという形式も学生から肯定的に評価されていることがわかる。

3.4. 大人数クラスに対する学生の評価

既に述べたように「ドイツ語フォーラム」と「ドイツ語総合コース」の文化を学ぶ方の授業は大人数クラスで実施されている。アンケートでは特に大人数クラスの是非についての質問は設けなかったが、授業についての改善すべき点、文句などを何でも自由に書くように奨励した自由記述欄にも大人数クラスについての不満を述べた学生は一人もいなかった。むしろグループ作業や、学生が自分で調査して発表する等今までになかった形の授業形態を評価する意見が多かった。¹²⁾ 1995年度の九大の全学共通教育についての学生アンケートでは、当該言語圏の文化を学ぶ授業での大人数クラス導入の是非を問う質問に対して、「反対」と「どちらかと言えば反対」が合わせて55.3%で、「賛成」と「どちらかと言えば賛成」の合計27.2%の倍以上であったが、実際に授業を受けた学生の評価はこの結果とは全く異なっていたことになる。¹³⁾

4. ドイツ語総合コースの利点と問題点

1年次からドイツ語だけでなく、ドイツ文化も同時に学ばせることの利点は、文化の学習により培われたドイツ語圏への興味がドイツ語学習への動機付けとなり、学生のドイツ語力向上につながることである。

統計的な比較はまだ行っていないが、もう一方の「ドイツ語を学ぶクラス」の方を担当している同僚の声によれば、総合コースの学生達は普通クラス（日本人教員が週2回とも担当する「演習コース」）の学生に比べて、ドイツ語学習に対してより熱心に取り組んでおり、総じて成績も良いということである。文化を学ぶことで、ドイツ語圏への興味が深まり、そこからドイツ語を学ぼうという気持ちにつながることは前節のアンケートで示された学生の意見とも一致している。

しかしながら「ドイツ語総合コース」では、ABCから始まるドイツ語の基礎の授業と平行して、ドイツ文化の授業を受講し、しかも文化の授業は各ゼメスターに1コマずつ、1年間で2コマ分あるので、ドイツ語そのものを学ぶ時間は1年間で2コマだけとなり、通常のクラスの半分になってしまうことから、総合コースの受講生の学力低下を懸念する同僚も少なくない。¹⁴⁾ 実際の学力比較は、統一テスト等を使った今後の実証的な研究の課題であるが、私見では、授業時間数の減少分はPCを使ったドリルの利用や自習の奨励、学生がモチベーションを持って学習することによる授業密度と授業効果の向上によって十分補えるものであると思う。

また学生のドイツ語力という意味で重要なのは1年修了時のドイツ語力ではない。大学卒業時、さらにはその後も含めてトータルで判断されるべきである。たとえ1年修了時（の期末試験の時）には初級文法の全項目を完璧に暗記していたとしても、単位さえ取れば、ドイツ語やドイツ語圏には興味がないという学生であれば、その後に自由選択でドイツ語を続けて履修することもなく、必修単位取得後はドイツ語をきれいさっぱり忘れてしまうことになるのに対して、ドイツ文化も学び、ドイツ語やドイツ語圏に対して興味を持った学生は、たとえ1年修了時のドイツ語の知識は普通クラスの学生に比べて多少劣るとしても、2年次以降も自由選択でドイツ語を履修したり、卒業後も自分で勉強を続ける可能性がはるかに高くなると言えるだろう。¹⁵⁾

ただし、現行のドイツ文化の授業に全く問題点がないわけではない。「ドイツ語フォーラム」の時代を含めると、この文化の授業には既に5年の歴史があり、教員個人のレベルではそれなりの教授法も蓄積されてきているが、これらのノウハウがドイツ語担当教員全員のものになっているとはとても言えない状態であり、初めて担当する教員はゼロから試行錯誤しているのが実態である。

5. まとめと提言

本稿では、新入生は英語圏以外の文化圏については非常に乏しい知識しか持っていないこと、学生自身もそのことを認識しており、言語だけでなく、文化についても学びたいと望んでいること、実際にドイツ文化を学ぶ授業を受講した学生は授業内容に満足しており、ドイツ語圏の文化への興味が深まったことが、ドイツ語学習への動機付けになっているこ

とを明らかにした。¹⁶⁾

最後に今後の課題として改善のための提言を2つ示しておきたい。

統一教科書の作成

前節で触れたように、現在はこのドイツ文化の授業で扱うテーマや素材は全て担当教員にまかされており、いわば個人芸としての Landeskunde になってしまっているが、一人の教員がカバーできるテーマは自ずから限られているので、今後はドイツ語教室全体、さらには学会レベルでの共同研究によってドイツ語圏の文化授業のための共通教科書もしくは共有教材集のようなものを作成することが望ましいだろう。¹⁷⁾ その際には、既存のドイツ文化事典のような形ではなく、授業ですぐ利用できる形で教材化された（できればビデオ等の映像素材をも含む）形が望ましい。

Web 上での教材の公開

上記のような共有教材集が実現した暁には、紙や CD-ROM などのメディアでドイツ語担当教員に配布するだけでなく、Web 上で公開し、学生がインターネットを使って大学のコンピュータールームや自宅で自習できるようにするべきであろう。1ゼメスターで扱えるテーマには限度があり、学生の興味も多様であることを考えれば、授業では扱えなかったテーマについて何時でも自習できるような体制を整えておくことは非常に重要である。

註

- 1) アンケートの原案では、スペイン語圏として中南米諸国、さらには当時はまだ開講されていなかったアラビア語圏の中近東諸国についても質問する予定だったが、データ処理を業者に委託している関係から設問数が多すぎるとして割愛されてしまった。
- 2) 九大の全学共通教育についての学生アンケートは、既に述べたように1994年度から毎年実施されているが、2000年6月現在の時点で報告書の形で印刷・公表されているのは94年度と95年度の2回分（それぞれ翌年の95年と96年に公刊されている）だけであるので、この96年度のアンケート調査結果は、ここで初めて公表されることになる。
- 3) 初習外国語の学習の重要な目的の一つは、日本語、英語に次ぐ、第3の視点を得て、複眼でものを見ることができるようになることであるが、大学生が本来の「知的エリート」になるためには、複数の言語文化に接することによる自国の言語文化の相対化と共に、アメリカというフィルターを通さずに世界を見られるようになることがぜひ必要であろう。
- 4) ただしドイツの首都はボンからベルリンに変わった。このQ2でドイツの首都を知っていると答えた学生のうち何人がこのことを知っているかは残念ながらわからない。塩谷幸子氏によれば、ドイツ語の授業で「Ich komme aus Bonn.」という文の訳を求められた学生が「ボンって何ですか?」と言ったそうである。(http://www.asahi-net.or.jp/~mx2y-soy/yodan/episode13.html)
- 5) 「ドイツ語フォーラム」は2年生向けの科目なので、実際に開講されたのは95年度から99年度までである。

- 6) 筆者が担当したクラスの受講希望者数と受講制限後に実際に受講を許可された人数は次の通りである。(97年度の当初の受講希望者数は手元にデータがなく不明)
- 95年度：138人→98人
96年度：136人→57人
97年度：？人→50人
- 7) 「総合コース」以外のコースの内容については、田中・田畑（2000）、94～95ページを参照。
- 8) 九大の英語科でも99年度から大人数クラスの「英米言語文化演習」を導入した。
- 9) 筆者の授業では、主にドイツのテレビ番組や映画等の映像メディアを利用した日独比較を行なっている。詳しくは田畑（2000）を参照。また『言文フォーラムNo20』にはWolfgang Michel、田中俊明、棚瀬明彦の各氏の授業方法が掲載されている。
- 10) アンケートでは、これ以外の質問もしているが、ここでは紙幅の都合で割愛する。
- 11) 1994年度の九大の全学共通教育についての学生アンケート調査でも「英語以外の外国語の授業を改善するために次のことが必要だと思いますか」という質問に対して、「その国の文化についての授業を増やす」という回答が9つの選択肢の中で一番多かった。ちなみに他の8つの選択肢を回答が多かった順に並べると「授業をもっとゆっくり進める」「文法・訳読よりもコミュニケーション中心の授業を増やす」「ネイティブスピーカーの授業を増やす」「ビデオ教材の利用を増やす」「授業内容を精選する」「授業時間を50分程度に短くするとともに授業回数を増やす」「1クラスの人数を少なくする」「テキストを含めて授業のレベルを上げる」となる。小人数クラスやネイティブスピーカーの授業よりも文化の授業が学生からは支持されていることがわかる。(『九州大学全学共通教育学生アンケート調査結果と自己点検・評価』1995を参照。)
- 12) もちろん文化の授業は必ずしも大人数で行なう必要はなく、小人数クラスであれば、さらにきめの細かい指導が可能であろう。ただし、今後は外国語担当教員の増員が期待できない以上、発信型の運用能力養成のために小人数クラスを増やすためには、一方で大人数クラスを作る必要があるので、大人数でも十分な効果を上げることができる文化の授業には大人数クラスを当てるのが適当であると考えられる。
- 13) アンケートの質問の文言は、「教養としての外国語や当該言語圏の文化等に力点を置く授業の場合、大クラス（100人以上）での講義形式の授業の導入に賛成ですか?」となっており、「講義形式」という部分が反対票を多くしたのかもしれない。「ドイツ語フォーラム」や「ドイツ語総合コース」では、教師から学生への一方通行の「講義」ではなく、グループ作業や、学生による調査・発表などの多様な形が工夫されている。(『九州大学全学共通教育 学生・教官アンケート調査結果と自己点検・評価』1996を参照。)
- 14) 「ドイツ語フォーラム」は2年生の選択授業であり、また履修できるのは1コマに限られていたので、文化の授業を行なうことによって、ドイツ語の運用能力を養成する授業の時間数が減るという問題はなかった。
- 15) このような学生のニーズに応えるために、ある言語の必要性を感じた時に、いつでもその言語を学習できるというシステムを整備しておくことが必要である。
- 16) もちろん入学時から既に将来の専門や就職との関係を意識して、英語以外の外国語をきちんと学習して使えるようになりたいと希望する学生もいる。このような学生にはイ

ンテンシブコースで集中的に学習し、短期間で当該言語の運用能力を身につける機会を提供すべきである。「基礎＋言語文化」と「インテンシブコース」の2本立てカリキュラムについては田中・田畑（2000）、105～108ページを参照。

- 17) 九大の英語科では大人数クラスの「英米言語文化演習」を効果的に運営するために独自の共通テキストを編纂中であり、2000年10月の出版を目指している。

参 考 文 献

- 九州大学全学共通教育自己点検・評価委員会(編)：『九州大学全学共通教育 学生アンケート調査結果と自己点検・評価』（九州大学大学教育研究センター）1995
 ———：『九州大学全学共通教育 学生・教官アンケート調査結果と自己点検・評価』（九州大学大学教育研究センター）1996
 関口一郎：慶応湘南藤沢キャンパス・外国語教育への挑戦（三修社）1993
 田中俊明・田畑義之：『マルチメディア時代のドイツ語教育』（九州大学出版会）2000
 田畑義之：ドイツ語授業におけるビデオの活用法（『独仏文学研究』第50号 2000）
 山内豊：『インターネットを活用した英語授業』（NTT 出版）1996
 早稲田大学文学部情報化検討委員会(編)：『インターネットで変わる英語教育』（早稲田大学出版部）1998